

J **apanese text**

2016年 秋/冬号 日本語編

デザイン

デザインラボ

文様
—— 紋で門を守る

文=内田 繁 撮影=西山 航
協力=下中菜穂、桑野佳莉

p.046

東洋医学では、人は背中のツボ「^{ふうもん}風門」から邪気が入り込むことによって、風邪を引くのだとされる。したがってこの「風門」を守ることができれば、風邪を引かない。

「背守り」は、「子供の魂を守るために、まず背中を守ろう」という鎌倉時代からの風習。実は今回はじめて知った風習だが、詳細を調べて納得した。昔から背中とは、魔の忍び寄る場所とされてきたのだ。江戸時代には2人に1人、1965年でも3人に1人は亡くなっていた子供たち。自らの子の魂を守るために、親は背中に一針一針文様を縫い入れ、風門を塞いできたのだ。

19世紀になると裁縫の教科書にも背守りが登場し、さまざまな文様を紙に縫って練習した。どうもこの頃から、魔を払うだけでなく、長寿や福を願う文様が増えた印象がある。それも一筆書き風の平面な図柄で、糸で再現しやすい工夫があり面白い。

縫い目はもちろん、こうした文様に込められた思いこそが、子の背守りとなるに違いない。

背守り (せまもり・せもり)

幼児の着物の背中央に縫い付けた、魔除けのお守り。縫い目に霊力が宿り、魔を除けると考えられた。今回紹介した文様の刺繍のほか、矢印状のシンプルな縫い目を入れるものや、布きれ、細帯、押絵を縫い付けるものなど、地域や時代によりバリエーションはさまざま。洋服が台頭し、幼児死亡率が低下してからは風習ごと忘れられていたが、ここ数年子供のTシャツや肌着の背に縫い付けられるなど、再評価されている。

内田 繁 (うちだ・しげる)

インテリアデザイナー。内田デザイン研究所所長。「人の暮らしを豊かにするデザイン」をコンセプトに、商業空間、住空間、家具、工業デザインから地域開発に至るまで、幅広い活動を国内外で展開している。代表作に、CHARIVARI 57 (N.Y.)、茶室「受庵・想庵・行庵」、門司港ホテル、THE GATE HOTEL 雷門など。メトロポリタン美術館、サンフランシスコ近代美術館、モントリオール美術館などに、永久コレクションが多数収蔵されている。

www.uchida-design.jp

(写真)

子供の着物の背に縫い付けられたのは「麻の葉」と呼ばれる文様。正六角形を元にした幾何学模様で麻の鋭い葉をあらわし、子供が麻のようにすくすくと育つように、またその無数の交点が魔除けになるようにと、江戸時代から産着に多用されていた。ほかにも、亀や鶴に長寿を、こうもり、転じてこうもり傘から福を、蝶から不死性をあやかるなど、さまざまな祈りが込められた文様が並ぶ。

文様図案：下中菜穂著『背守り練習帖』（エクスプランテ刊）より。

建築

—— 天と地と町をつなぐ礼拝堂

写真=阿野太一
文=佐野由佳

p.048

平田晃久さんが設計した、日本キリスト教団東戸塚教会は、住宅街のなかに突如現れたおとぎ話の家のようだ。幾重にも重なる白い屋根は雲のイメージ。室内に入れば、ハイサイドライトから降り注ぐ光が、厳かで温かな空気をつくりだす。

設計が始まる前に牧師から聞いた旧約聖書の創世記「ヤコブの梯子」の話、出エジプト記の「天幕」の話が印象的だったという平田さん。天と地をつなぐ、神と人をつなぐ装置としての梯子、軽やかで移動可能な幕屋が人々が集う場の原型だったこと。そして、この教会に集まる人たちの家族的な気配。

「家のような、それでいて屋外で説教を聞いているような場

所にしました。印象深く刻まれた事柄を、素直に形にしてみましたかっただです」。

ここは、地域の人にも開かれた場として使われる計画がある。場ができることで、教会という枠を超えて、人や町に起こる変化について、あらためて思いをめぐらせる機会になったと平田さんは言う。

鉄骨造の2階建て。屋根は鉄板、ファサードはレッドシダーの規格品の角材を半分に切って用いている。「建物から家具まで、全部設計できたことは楽しかった」というように、礼拝用の椅子も平田さんのデザインで、ブルーのグラデーションで張られた座面のテキスタイルは安東陽子さんの提案。照明設計は岡安泉さん。礼拝堂見学は事前予約が必要。

ht-church.org/wp

アート

——日本発のポップなバルーンアート

撮影＝松本壮由、西山 航

文＝編集部

p.050

近年、バルーンアートの人気が高まっている。世界的なコンテストで優勝を重ねる、芸術品として極めて日本人アーティストがいる一方で、小規模な教室が各都市に誕生し、個人愛好者も増え続けている。デザインのデフォルメ、色彩のセンス、繊細な手先の技術が必要なバルーンアートは、元来日本人に向いているのかもしれない。

ネットで作品を発表し、「ポップでリアル」と海外メディアにも注目されているのが、松本壮由さんだ。「日本ではアニメやゲームのキャラクターものの人気が高いのですが、僕が好きなのは爬虫類や昆虫やタコなど。無駄なパーツをなくして、シンプルにリアルに作ることを追求しています」。海外のファンからは、セミの幼虫など松本さん好みのいわゆる「キモい」ものが人気だということも面白い。「ひとつ作るのに2時間から10時間。デザインを考えるのに1か月かかるものもあります」。想像力次第で、何でも作れるバルーンアート。さらに表現の世界は広がりそうだ。

松本壮由（まつもと・まさよし）

化学系メーカーに勤務しながら、休日一人で創作活動を行っている。

最新作は isopresso.tumblr.com、Twitter@isopresso で公開。

簡単なバルーンアートの作り方も紹介している。 isopresso.web.fc2.com

接着剤などを使わず、すべて風船をねじったりひねったりして作られる。手足の節もリアルに表現されたハチは約2時間を費やした。フラミンゴはシンプルな色使いで、羽の躍動感を表現。ガンダム、トロロなどアニメやゲームのキャラクターも数多く製作している。左は、任天堂Wiiの人気ゲーム「Splatoon」の「ホタル」(Marie)。バルーンはすぐ劣化するのので展示などは難しく、発表の場はWEB上でやっている。

デザインを考えるのに1か月、製作に約10時間を要したというイグアナ。ウロコのカラーグラデーションも見事。

プロダクト

——「菰樽」がモダンデザインに

文＝編集部

p.051

日本では、結婚式や祝賀会の演出として「鏡開き」がしばしば登場する。掛け声とともに威勢よく、酒の入った菰樽の蓋（鏡板）を木槌で叩いて開き、幸せと成功を願って乾杯するのだ。この菰樽は江戸時代に生まれた。当時、酒が入った大きな樽を船で運搬する際、保護のために藁の菰でくるみ、酒の銘柄や商標を焼き付けたり刷り込んだりした。この菰樽を、グラフィックデザイナーとのコラボレーションでモダンに生まれ変わらせたのが、「KOMODARU LINK」。日本の風景や四季を描いたMINI KAGAMIBIRAKIは海外へのおみやげにもぴったりだ。菰樽を家具に応用したKOMODARU FURNITUREも登場。100年以上にわたり老舗工房が手作業で製造してきた菰樽。その造形を生かした新たなプロダクトとして、世界に発信している。

MINI KAGAMIBIRAKI

菰樽の小型版。酒、ジュースなどを入れて、気軽に「鏡開き」を楽しむ

ことができる。樽:直径約 18.0 ×高さ 17.5cm (容量 720ml) 木槌、木杓、木杓などが付いている。樽や木杓はオリジナルデザインで製作することも可能。各 7000 円

右:「まつり」。上:「タイル富士」、北斎の浮世絵がモチーフ。ともにデザイン by Kazuki Sumi

KOMODARU FURNITURE

着物の小紋模様をモチーフにしたテーブル「小紋樽」。本体(直径約 58.0 ×高さ 59.0cm)14万円。本体は小物入れとして使うこともできる。テーブルトップの価格は材質によって異なる。

KISHIMOTO KICHIJI SYOUTEN Co.,Ltd

www.komodaru.co.jp

Tel. 0120-965-905 (リアルジャパンプロジェクト)

プロダクツ —— 重ねればアートになるキャンドルホルダー

文=編集部

p.051

一見縦長のオブジェ、それがひとつひとつに分かれて火を灯される。ちょっとした驚きを与えてくれるのが、キャンドルホルダー「Helical」だ。それぞれ同じ形状だが、連続性を考えてデザインされた曲線が、積み重ねることで美しいらせんを描く。これは富山県高岡市にあるナガエ株式会社のオリジナルデザインブランド「naft」のもの。高岡市の鋳造業は、江戸時代初期から 400 年以上の歴史を誇り、「naft」はその伝統を受け継ぎながら、先端技術と先進デザインを融合し、個性的なアイテムを生み出している。

スタッキングキャンドルホルダーは、複数積み重ねて高い位置から照らすことも、ひとつずつ使って低く広く照らすこともできるのが特徴。

Helical

H2.6 × W7.0 × D7.0cm (1個) 3600 円 (キャンドル付・3個セット)

(製作・問い合わせ先)

ナガエアート事業部 Tel. 0766-31-5633 nagae-en.com